

笹川記念保健協力財団 地域啓発活動助成

(西暦) 2018 年 2 月 9 日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
会 長 喜 多 悦 子 殿

2017 年度地域啓発活動助成

活 動 報 告 書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

がん診療および緩和ケアに関する研修活動・啓発活動

活動団体名： 国立大学法人 滋賀医科大学

活動者（助成申請者）名： 目片 英治

I. 活動の目的

医療従事者向けの『東近江がん診療セミナー』、一般市民向けの『東近江医療圏がん診療市民公開講座』『市民公開講座』、がん征圧チャリティイベント『リレー・フォー・ライフ』、これらを活動の柱として、がん診療に関する正しい知識の提供と、がん患者さんやそのご家族へのケアやサポートができるような啓発活動を行ってきた。

がんは国民の2人に1人が罹る疾患でありながら、がんを宣告された患者さんやその家族は戸惑い、不安に駆られる。サポートする側（医療者）にとっても、サポートされる側（患者さんや家族）にとっても、がんに関係する様々な情報を発信することを目的にこれらの活動を遂行してきた。

がん治療のうち、とりわけ“緩和ケア”については『東近江がん診療セミナー』『東近江医療圏がん診療市民公開講座』『市民公開講座』でも重点的に取り上げ、終末期医療あるいはターミナルケアと誤解されがちな緩和ケアを、がんと診断された時から治療と同時に並行して行われるべきという考え方にに基づき、医学的な知識や手法だけでなく、患者さんが自分らしく生活することも含めてが“緩和ケア”であるという認識を持ってもらえるようにコーディネートした。

II. 活動の内容・実施経過

(1) 東近江がん診療セミナー



平成 28 年度より開始した『東近江がん診療セミナー』は今年で 2 年目を迎え、平成 29 年度は助成費により、上記 7 回のセミナーを行った。(助成費用、助成期間外として、第 12 回東近江がん診療セミナーを 4/20 に開催、第 20 回東近江がん診療セミナーを 3/15 に開催予定)

院内・院外の医療従事者を対象に、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、事務職員等、多職種がそれぞれの分野がセミナーで習得した知識を生かせるようテーマを選択し、また講師、発表者も職種による偏りが無いようバランスに配慮し、マイクを握る者も受講者も積極的に会に参加できるような仕掛けを心掛けた。

また、講演のテーマに沿った症例を振り返るキャンサーボードでは、過去の症例を例に多職種間で意見を交換し、患者さんにとってより良い治療に結びつけられるよう、業務改善のきっかけとなるような場とした。

また、このセミナーを契機にさらに知識を深めたいと思う者同士が自主的な勉強会を行うなど、職場の活性化とチーム医療の推進に役立てることができた。

(2) 東近江医療圏がん診療市民公開講座・市民公開講座

第7回東近江医療圏がん診療市民公開講座

自分らしい暮らしを支えるがん診療

日時 11月3日(金・祝) 午時1時30分～3時40分 (予定)

場所 東近江総合医療センター 南棟2階(2F)

講演1 「がんとからのハビビ」
東近江総合医療センター 放射線科 土屋 隆之
東近江総合医療センター 放射線科 土屋 隆之

講演2 「がんの心と体のハビビ」
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター 関根 孝典

講演3 「最新のがん治療: 小児のがん治療について」
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター 関根 孝典

講演4 「最新のがん治療: がん治療について」
東近江総合医療センター 放射線科 土屋 隆之

第8回東近江医療圏がん診療市民公開講座

自分らしい暮らしを支えるがん診療

日時 1月21日(日) 午後1時30分～3時30分 (予定)

場所 東近江総合医療センター 南棟2階(2F)

講演1 「最新のがん治療: がん治療について」
東近江総合医療センター 放射線科 土屋 隆之

講演2 「がんの心と体のハビビ」
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター 関根 孝典

講演3 「がんとからのハビビ」
東近江総合医療センター 放射線科 土屋 隆之

東近江総合医療センター 市民公開講座

自分らしい暮らしを支えるがん診療

平成29年9月16日(土) 13:30～15:30 (受付開始13:00～)

会場 東近江総合医療センター 南棟2階(2F)

●プログラム

1) がんとからのハビビについて
2) 「がんとからのハビビ」を身近に感じる
3) がん治療について

お問い合わせ
東近江総合医療センター 地域医療連携室
0748-22-3030 (代)

平成 26 年より年 2 回のペースで開催してきた『東近江医療圏がん診療市民公開講座』は今年で 4 年目を迎え、平成 29 年度は“自分らしい暮らしを支えるがん診療”をテーマに、上記の市民公開講座を行った。

内容は、最新のがん治療だけでなく、がん患者さんや家族に共通する日常生活における悩み事や困り事、社会生活における不安や心の持ち方など、万が一がんに罹患したとしても自らがよりよい治療が選択できるよう、一般の市民の皆さんが理解しやすく、身近な内容となるように心掛けた。

また東近江総合医療センター（滋賀医科大学総合外科学講座設置病院）が 9 月 16 日に行った『市民公開講座』では、地域住民に対して、日常の生活からがんに罹患した状況まで

を想定し、「こころとからだ～癒しの力を高めていくコツ～」のタイトルで、NPO 法人サイモントン療法協会副理事 田村祐樹先生に日常でもできる緩和ケアについて講演をして頂いた。

(3) リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2017 滋賀医科大学



『リレー・フォー・ライフ』とは、がん患者さんやそのご家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧をめざすチャリティーイベントで、2016 年は世界 27 カ国、約 6,000 カ所で開催され、日本では 49 カ所で開催された。

とりわけ、学生が主体となって大学で開催する『リレー・フォー・ライフ』を「カレッジリレー」と呼び、日本では昨年の本学（滋賀医科大学）が初の開催となった。今年も学生が主体となってこのイベントを行い、我々はこのイベントを盛り上げ、応援する目的でマフラータオルを作成し、イベントに参加した。

III. 活動の成果

『東近江がん診療セミナー』については平均 52 名程度の参加がある。このような多職種が集まるセミナーにおいては、どうしても医師の意見が主眼となりがちであるが、患者さんのケアに直接関わる看護師や薬剤師にスポットを当て、発表や司会も看護師や薬剤師が行うことで、主体的な姿勢と視点を持ちながらセミナーに参加することができたのではないかと考えている。

5 月に実施した『東近江がん診療セミナー』のテーマである「がん性疼痛のケア～評価方法と記録～」で取り上げた“がん性疼痛緩和ユニットパス作成”は、当院（東近江総合医療センター）においての一般的な痛み評価と区別して、がんの持続痛と突発痛に対する評価方法と記載方法を統一することと、がん性疼痛に対して、スタッフが積極的にかかわっていく環境を不十分ながら構築できたことは特記すべきことであつたと考えている。この成果については、『第 70 回国立病院総合医学会』（2017/11/11～12）と『第 18 回日本クリニカルパス学会学術集会』（2017/12/1～2）で報告した。

このように、このセミナーが、現場の医療スタッフの向上心やモチベーション維持に重要な役割を果たしている他、セミナーを運営していくうえで多職種間のコミュニケーションツールとしての役割を果たしていると考えられる。

それらを検証する意味でも、今回、貴財団より地域啓発活動助成をいただいたことを契機に、本セミナーが受講者やチーム、ひいては病院全体にとって、どのような効果をもたらしたかアンケート調査を実施したので助成者報告会で発表したいと考えている。

『東近江医療圏がん診療市民公開講座』は第7回が73名、第8回が89名の参加があった。今年度のテーマである“自分らしい暮らしを支えるがん治療”は、万が一がんになったとしても、心の持ち方と周囲の協力によって得られる自分らしさを大切にしながら、治療に専念してもらえよう社会になることを願って、2回の公開講座を実施した。2018年4月からの診療報酬の改定で、がん患者さんの主治医が治療と仕事の両立について、産業医との連携した際に受け取る診療報酬が新設されるに先立ち、がんという病気と立ち向かう社会的サポートという観点から、市民公開講座で話題に取り上げたのは、意義深いことであったと考える。参加者に協力いただいたアンケートからは、「身近な問題で勉強になる」「医療者がいろいろなサポート体制をとろうとしているのを知って、とても心強く思った」「ずっと継続してほしい」などの感想が寄せられた。

また『市民公開講座』は97名の参加があり、アンケート結果から「緩和ケアという選択肢が重要であることに気づいた」という意見があり、大きな成果であったと考える。

『リレー・フォー・ライフ』は『東近江医療圏がん診療市民公開講座』を共同開催する3団体（滋賀医科大学・東近江総合医療センター・近江八幡市立総合医療センター）で参加した。がん征圧を目指す仲間たちとともに、助成金で作成させて頂いた“マフラータオル”をシンボルマークに、がん患者さんを支援し、がん征圧を目指す仲間とともに交流を深めた。



IV. 今後の課題

まずは、これらのセミナー・イベントを継続していくことが最優先課題である。幸い、

認知度も定着しつつあるので、さらに多くの人・地域に広めていくことが課題である。アンケート結果や最新のがん治療の動向、社会情勢などから、参加者が知りたい情報を探り当て、「来てよかった」「聞いて勉強になった」「今後の仕事（生活）に役立てたい」と思っただけのような情報を提供し、発信する側と受け取る側の両方が手応えを感じられるようなテーマを選択していくことも重要だと考える。

V. 活動の成果等の公表予定（学会、雑誌）

患者さんが感じているがん性疼痛の変化を、電子カルテのパス機能を用いて、(1)患者病態の見える化、(2)医療者間における情報の見える化、(3)緩和ケアチーム活動の見える化が促進された。2018年度の『第71回国立病院総合医学会』において、研究発表を継続していく予定である。